

出発点「矢作川の恵みで生きる」の共有

検討の進め方

山村をとりまく
社会背景の変遷と
望ましい将来像

STEP1

過去と現在を
知る

理解と情報共有を
促進する

右に記載した事項について、具体的に「知る」機会を設け、情報共有を図る
→ 市民企画会議
→ 勉強会に対応

実現に向けた
課題と解決手法

STEP2

未来像実現に向けた
課題と解決手法を
考える

情報共有を踏まえ、ま
ず「人の問題」をテー
マに解決手法を検討

→ 市民会議
→ 地域部会に対応

STEP3

できることから
活動を
実践する

人と山村

高度経済成長前から後へ

現代

近未来
(放っておくとどうなるか)

望ましい
未来像

- 自給的経済、自立、自治、誇りがあった。
- 百業をやっていた。

- 若者が中下流の都市へ流出した。
- 拡大造林によって広大な人工林が形成され、長期間管理し続ける必要があったが、その担い手がなくなった。

- 山村における若者の就業機会が乏しい。就業できても定着できない。
- 現代では、山村は過疎化、少子化、高齢化、核家族化が進行している。

- 限界集落、消滅する集落が増えていく。残された集落でも山村単独での自治や経済的な自立が困難となり、コミュニティが崩壊する。
- 国、県、市町村ごと、部局ごとに目指す森林の姿がバラバラで、流域圏一体となった森林管理が行われていない。

- 流域圏にとって望ましい山村のあり方は、収入は多くなくても安定した若者の仕事があり、山村の資源を持続可能なやり方で利用しつつ、経済的に自立すること。
- 自然の恵みを利用できる知恵のある人が定住していること。

森 林

- 薪炭林施業が行われていた。
- 最上流域や額田地区ではスギ、ヒノキ人工林施業が行われていた。
- 藤岡・小原・旧豊田・岡崎にはハゲ山も多かった。

- もともと林業地だったところでも、そうでないところでも、もうかるというもくろみと国策により、拡大造林（広葉樹からヒノキ、スギへ転換）を推進した。
- 国産材を流通させる仕組みが輸入木材に比べて整わず、国産材の価格が低下し、林業が業として成り立たなくなった。

- もともと林業地でなかった地域では、多くの所有者が素人山主で林業を知らない。
- 管理が行き届かないため過密化した水消費型森林や放置人工林からの土砂流出・崩壊の危険性が増加している。

- 林業は利益を確保せざるを得ないことから、森林皆伐後の再生林の放棄が起こり、森林の水土保持機能が喪失する。
- 不適切な林道・作業道・搬出路が作られ、放置され、土砂が流出し、崩壊の危険性が高まる。

- 流域圏にとって望ましい森林は、自然の力で持続する生態系と人による持続的な維持管理下に置かれる生態系が最適に配置され、多様な生物が生息し、木材や水などの恵みを中下流にもたらしてくれる森林。
- 木材生産を主目的として管理する森林と、水土保持機能の発揮を主目的として管理する森林を区分し、木材生産に適さない人工林を天然林に戻していく。

実現のための課題と解決手法

森林の適切な管理は、まず山村の再生(担い手作り)から！

当面の課題1 誰がやるか(人と地域の問題)

課題

- 現金収入、仕事、医療、教育など、出発点に到達する以前の問題が山積。

解決手法(例)

- 既に自発的に始まっている優れた取組を集めた「山村再生担い手づくり事例集」の策定を通じ、山村再生の担い手づくりを支援する具体的な方策を検討する。
- 上下流をビジネスサイクルでつなぐ産業振興の推進（中下流都市中心部での上流生産物販売拠点の設置など）

役割分担

市民・学識経験者・行政が、対等な立場で、一体となって推進していく。

山村再生のために
先ず“人づくり”が必要
そのうえで“森づくり”にも
取り組む必要がある。

担い手づくり事例集イメージ

山村再生担い手づくり事例集

成功事例1

成功事例2

失敗事例1

.....

当面の課題2 何をやるか(森の問題)

課題

- 流域圏として統一性のある森林管理を行い、矢作川の森の恵みが中下流や海までいきとどくためのガイドラインが必要。
- データ不足・研究の遅れによって、「植林こそが正しい」といった誤解を正すことが必要。

解決手法(例)

- 「矢作川流域圏の森づくり・木づかいガイドライン」の策定
- モデル林の設定とモニタリング
→ ガイドラインの検証のため、土砂を流す森、節水型森林の手本を作る。

役割分担

市民・学識経験者・行政が、対等な立場で、一体となってガイドラインを策定し、モデル林を設計、施業、研究し、モニタリングを行っていく。

行政・学識経験者・市民が対等な立場で、一体となって策定